やさしく始める農業系サークルづくりガイド
～はじめの一歩から、地域や企業とのつながりまで～

令和８年３月
関東農政局

農林水産省

はじめに

近年、SDGs や地域づくりへの関心の高まりから、農業にふれたいと願う学生が増えています。しかし実際には、地域とのつながり方、安全管理、活動資金づくりなど、踏み出すには不安のある場面も少なくありません。

本書では、「まず触れてみる」→「仲間づくり」→「サークル運営の工夫」→「活動の広がり」→「発展的な挑戦」→「地域とともに進化」という、ステップを重ねていく流れに沿って、関東農政局管内での大学生の実践事例をもとにポイントを整理しました。

初めての方でも、段階に応じて無理なく進められるよう構成しています。すでにサークルを運営している方にとっても、資金調達や広報、地域連携など、次のステップを考える際のヒントが見つかるはずです。活動地域の特性やサークルの状況に合わせ、活用してください。

「やってみたい」という気持ちは、小さくても確かな一歩です。その一歩が仲間を呼び、地域を動かし、未来をつくる力になります。楽しみながら、あなたのペースで挑戦を広げていきましょう。

活用方法

本書は、農業系サークルを始めたい大学生はもちろん、学生と地域のつながりづくりに関わる多くの方にご活用いただけます。

- **大学生**
  サークルづくりの基本が一通り分かる入門書です。農業体験の始め方から仲間づくり、発展的な活動まで、必要なポイントを押さえられます。
- **大学（学生課・地域連携センター など）**
  学生支援の流れを素早く把握できるガイドとして活用できます。地域とのつなげ方、助成制度の活用、安全管理の整理等に役立ちます。
- **地方自治体・JA（農協）**
  学生を受け入れる際のヒントが得られる参考書です。関わり方や活動提案のコツ、信頼関係のつくり方を学べます。
- **報道関係者**
  学生の地域活動を取材する際の参考資料として利用できます。各地の実践例や取り組みの流れを短時間で把握できます。
- **地方農政局の職員**
  学生・大学・地域の視点を整理して理解するための資料として役立ちます。相談対応や関係者間の調整の際に、説明の参考として活用できます。

目　次

第１章　農業に触れてみよう･････････････････････････1

第２章　農業系サークルで仲間をつくろう･････････････3
－相談先、準備、役割分担

第３章　サークル運営の基本･････････････････････････7
－安全管理、信頼構築、記録・報告

第４章　資金調達による活動の拡大･･････････････････････10
－大学の助成、農産物等の販売、外部資金の活用

第５章　発展的な取り組みへの挑戦･･････････････････････13
－農産加工、ブランド化、大学間／高大連携

最終章　地域とともに進化するサークルへ･･････････････16
－サークルの法人化、産官学連携

第１章　農業に触れてみよう

農業に興味はあっても、「何から始めればいいのかわからない」「本格的な活動はまだ不安」という学生は少なくありません。
でも、農業との出会いは「小さな一歩から」で大丈夫です。
この章では、最初の一歩を踏み出すための視点を紹介します。まずは、構えずに、できるところから始めてみましょう。

○「頼れる人にまず声をかける」（見学や軽作業から無理なくスタート）

もし、知り合いの農家の方がいるなら、見学や短時間のお手伝いができないか、まずは気軽に声をかけてみましょう。
例えば、収穫のお手伝い、野菜の仕分け・袋詰めなど、初心者でも取り組みやすい軽作業があります。短時間の参加でも歓迎されることが多いです。
小さくてもいいので、まずは「体験してみる」こと。その一歩が、農業との距離をぐっと近づけてくれます。

○「楽しみながら入口をふやす」（イベントや仲介サービスを活用）

地方自治体や JA（農協）などが開催する農業体験イベントは、初心者にぴったりです。また、知り合いの農家の方がいなくても、学生でも安心して申し込める民間の仲介サービスを使えば、「どこへ行けばいい？」「どう連絡すればいい？」という不安を解消し、スムーズに最初の一歩を踏み出せます。
自分が楽しい、参加しやすい、と思える方法を選ぶことが、続けるための大切なコツです。

○「小さな成功をつみ重ねる」（ひとことメモや写真を残す）

一度でも農作業に関わると、「思ったより楽しかった」「農家の方が親切だった」と感じることが多いはずです。そんな小さな成功体験を、ひとことメモや写真で残しておきましょう。できたことに目を向けることで、継続参加や仲間づくり、企画づくりに自然と踏み出せます。
小さな前進の積み重ねが、次の一歩を軽く、確かなものにしてくれます。

取組事例

📘 気軽に立ち寄れる“都会の農作業”

武蔵野大学の屋上農園は、学生が自由に参加でき、雑草取りや土づくりなど、初心者向けの軽作業が中心です。都市の中で気軽に自然に触れられ、「まずやってみる」きっかけとして、見学や会話だけの参加も歓迎されています。　武蔵野大学.pdf

📘 仲介サービスで“初めの一歩”がもっと身近に

東洋大学では、農業体験に踏み出す際の「農家の方々との連絡が難しい」という悩みを、民間の仲介サービスの活用で解消しました。これにより、安心して農家を訪れ、みかん畑での除草や畑の整備などの作業に参加できました。　東洋大学.pdf

第２章　農業系サークルで仲間をつくろう
－相談先、準備、役割分担

第１章で踏み出した小さな一歩を、続けていく力に育てるためには、「仲間と一緒に進むこと」が大きな助けになります。誰かと力を合わせることで、準備や安全面の負担が軽くなり、大学の支援も受けやすくなります。また、少しずつ記録や発信を重ねれば、地域や農家の方々とのあたたかな信頼も育まれ、活動の場はゆっくり、でも確実に広がっていきます。

この章では、「まず誰に相談するか」「ちょっとした準備」「続けるための役割分担」の３つを事例とともに紹介します。

1 まずは相談から、つながりはここから広がります

農業系サークルを始めるときは、まず大学の学生課や地域連携窓口に気軽に相談することから始めてみましょう。そこから、自治体の農政担当課や JA（農協）を紹介してもらえることも多く、活動場所の相談や農家の方々とのつながりづくりがスムーズに進みます。

最初に“顔を見せて話してみる”ことが、自然とつながる一歩になります。

・活動内容と目的の整理

いつ、どこで、どんな作業を行うのか、目的を明確にする。

・どこで、誰と活動できるか

活動先の見学や作業時間など情報を確認する。

取組事例

📘 東京家政大学がつなぐ、最初の一歩

東京家政大学ヒューマンライフ支援センターでは、学生が地域とつながる機会を広げる窓口として機能し、相談から協働までをサポートしています。最初に「直接会って話す」ことで、活動の第一歩が開いていきます。　東京家政大学.pdf

📘 明海大学が支える地域連携の入口

明海大学では、地域連携の入口として、「JA いちかわ」での援農ボランティアは外国語学部が、学内での都市型養蜂プロジェクトはホスピタリティ・ツーリズム学部が中心となって、学生の地域参加を後押ししています。　明海大学.pdf

MEMO

2 ちょっとした準備が安心の近道

農家の方々や地域と気持ちよく活動するには、ちょっとした準備と日頃のコミュニケーションが大切です。活動の予定や目的をまとめた簡単な計画書を共有しましょう。暑くなる時期の熱中症やケガなどに対する安全面を考慮し、体制を整えておくと安心してもらえます。大学の保険制度を活用するのも有効です。

- **事前に押さえておきたいポイント**
  連絡体制、集合場所や移動方法などを記載した計画書を共有する。
- **安心して参加するための準備**
  服装や持ち物、熱中症などの安全対策、作業の注意点などを確認する。
  ※ 作業内容に応じて、大学の保険制度も確認。

取組事例

埼玉大学の“ひと手間の準備”がつくる信頼

埼玉大学の「有機農業研究会」では、地域と気持ちよく関わるために、事前の計画づくりや準備を重視しています。地域での実践も計画に沿って進められ、OB・OG の協力を得ながら取り組む姿勢が、地域からの信頼につながっています。　埼玉大学.pdf

十文字学園女子大学の“事前計画と情報共有”

大学による子ども食堂でのメニュー提供では、食材の調達時期や必要量を事前に計画し、関係者間で共有しています。こうした準備の積み重ねが、イベントを信頼して任せてもらえる環境づくりにも役立っています。　十文字学園女子大学.pdf

3 役割分担

サークルを長く続けるには、無理のない運営体制づくりが欠かせず、なかでも一人ひとりの役割分担が重要です。さらに、大学助成や販売収益などを組み合わせた資金の工夫と、SNS やサークルのホームページで活動を発信する広報を加えることで、サークルは安定し、仲間や応援も自然に増えていきます。

- **運営担当（企画・調整）**
  活動計画づくり、地域や大学との連絡、当日の流れの調整などを担う。
- **会計担当（活動資金の管理）**
  サークル会費や必要経費の入出金整理を担う。
- **広報担当（仲間と応援を広げる役割）**
  SNS 等での発信、活動記録の整理、報告用資料の作成などを担う。

取組事例

横浜国立大学の“続けやすい運営”

横浜国立大学の「Agridge Project」 では、大学の支援や販売収益などを組み合わせ、無理のない運営体制を整えています。4 つの部門で役割を分担することで負担が分散され、SNS や HP での発信が仲間づくりにもつながっています。

横浜国立大学.pdf

役割分担が支える「黒川岡上学生農場」

明治大学の学生が有志で集まった団体「黒川岡上学生農場」では、栽培から加工・販売、交流までを学生主体で実施しています。運営・会計・広報の分担により、日常作業からイベント、外部との連携活動まで行っています。 黒川岡上学生農場.pdf

第３章　サークル運営の基本
－安全管理、信頼構築、記録・報告

小さな一歩から始まった活動を、安心して、長く続け、広げていくためには、日々の運営を支える“基本”が欠かせません。その中心になるのが、安全管理、信頼構築、記録・報告の３つです。

安全管理が整っていると、メンバーが無理なく参加でき、活動が途切れにくくなります。信頼構築は、地域や農家の方々との関係をあたたかく育て、活動の場や学びを広げてくれます。記録・報告を続けることで、次のメンバーへの引継ぎがスムーズになり、大学への申請や改善にも役立ちます。

この章では、活動を支えるこの３つの基本を、事例とともに紹介します。

1 安全管理

農作業には、熱中症やケガなどのリスクがあります。安全管理はサークル運営において優先事項です。

・事前確認：作業内容、危険箇所、必要な装備をメンバーに共有する。
・体調管理：水分補給・休憩時間を確保する。無理な作業を避ける。
・緊急対応：応急セット、連絡体制、最寄り医療機関を確認する。

取組事例

📘東海大学の“安全設計”ボランティア

東海大学のボランティア活動は、学生が安全に活動できる環境づくりが重視されています。活動前には作業内容を共有し、現地では休憩のタイミングを確保するなど、無理のない参加をサポートしています。　東海大学.pdf

📘やさしく守る、屋上農園のひととき

武蔵野大学の屋上農園では、自由参加でありながら、安心して活動できるよう安全配慮を心がけています。作業前に内容を確認し、都会の屋上でも熱中症を防ぐため、こまめな水分補給と無理のない休憩を大切にしています。　武蔵野大学.pdf

2 信頼構築

地域や農家の方々との信頼関係は、活動を長い間継続することで構築されるものです。以下の点を心掛けましょう。

・約束を守る：時間を厳守し、作業内容を確認する。
・誠実な対応：困ったことは早めに相談し、無理な要求はしない。
・感謝の気持ち：活動後の挨拶や SNS での発信、報告を行う。

取組事例

📘 茨城大学に学ぶ“つながりを育てる姿勢”

茨城大学の「Ami Dream farm」では、地域や農家の方々とのつながりを大切にしながら活動を広げています。SNS や電話で丁寧に相談を重ね、活動後には挨拶や情報共有を欠かさない姿勢が信頼を育てています。　茨城大学.pdf

📘 宇都宮大学が育むあたたかな信頼

宇都宮大学の里山キャンパス「益子家」では、地域との丁寧なやりとりを大切にしながら活動を進めています。棚田の再生や空き家の改修など、地域の人々の協力を得ながら進め、約束を守り誠実に向き合っています。　宇都宮大学.pdf

3 記録・報告

活動の記録は、次年度への引継ぎや助成金申請に役立ちます。

・活動記録：日時、場所、参加人数、作業内容、写真を整理する。
・報告書：大学や協力団体への簡潔な報告を定期的に提出する。
・データ管理：クラウドや共有フォルダを用いてメンバー間で共有する。

取組事例

📘 記録がつなぐ、東大むら塾の 10 年

「東大むら塾」では、日々の活動を記録し、引継書として共有する仕組みが運営を支えています。作業内容や段取りを整理して残すことで、次のメンバーも迷わずに活動を続けることができ、地域との協働も安定しています。　東大むら塾.pdf

📘 記録と共有が支える早稲田大学の継続活動

早稲田大学の農業サークル「こだま」では、農作業体験、直売所調査、夏合宿、学園祭での販売、産業フェスタ出店など多様な活動を記録し、年次報告会や SNS 分析を通じて翌年度の改善につなげる仕組みが定着しています。　早稲田大学.pdf

第 4 章　資金調達による活動の拡大
－大学の助成、農産物等の販売、外部資金の活用

活動を広げていくには、日々の運営に加えて安定した資金づくりが大きな支えになります。資金があることで、必要な資材の準備や移動がしやすくなり、新しい企画への挑戦や地域との協働の深まりにつながります。その柱となるのが、大学の助成、農産物等の販売、外部資金の活用です。

大学の助成は、活動の土台となる初期費用を安心して確保できます。農産物等の販売は、資金確保と地域交流の両方に役立ちます。外部資金の活用は、企業・NPO・自治体との協働を通して活動の幅を広げてくれます。

この章では、これら 3 つの方法を事例とともに紹介します。

1 大学の助成

学生団体や課外活動を対象とした助成制度を調べ、締切や必要書類を確認しましょう。助成金は、活動の基盤を支える第一歩です。

- 申請のポイント：活動目的、年間計画、予算案を明確に記載する。
- 活用例：農業体験イベントの交通費、資材購入費、広報費など

取組事例

📘 大学の支援が後押しする Agridge の挑戦

横浜国立大学の「Agridge Project」では、大学からの活動費支援を活用しながら、農業体験や地域連携の企画を安定して進めています。基盤となる資金が確保されていることで、学生は企画づくりや地域との協働に集中できます。　横浜国立大学.pdf

📘 大学の支援で広がる成蹊芋サーの活動

成蹊大学の「お芋掘りサークル」（芋サー）は、成蹊大学ボランティア支援センター及び成蹊学園サステナビリティ教育研究センターの登録団体として活動しています。また、大学主催コンテストで採択された資金を活用し、各種活動を展開していきます。　成蹊大学.pdf

2 農産物等の販売

収穫物や加工品の販売は、資金調達と地域交流の両方に役立ちます。

- 販売場所：学園祭、地域イベント、大学生協など
- 価格設定：原価＋適正利益を基本に、親しみやすい価格を意識する。

取組事例

📘 販売の工夫が広げる、早稲田の地域連携

早稲田大学の農業サークル「こだま」は、JA 直売所での販売提案やイベントでの野菜販売を通じて、活動費の確保と地域との交流を実現しています。消費者の購買傾向を踏まえた PR で、野菜の魅力や使い方を伝えています。　早稲田大学.pdf

📘 地域の恵みを届ける 國學院の販売活動

國學院大学の「KOOGA」では、援農の一環で収穫した甘夏を加工し、そのジャムなどの収益を活動費に充てることで、地域交流と資金確保を両立しています。無理のない価格設定と丁寧な PR で地域の魅力を伝えています。　國學院大学.pdf

3 外部資金の活用

企業や団体との連携は、資金や資材の支援を得る有効な手段です。

- 協力先の例：農業資材メーカー、食品企業、地域 NPO、自治体
- 提案のポイント：活動の社会的意義、SDGs との関連、熱意を伝える。
- 協力内容：資供、イベント協賛、広報支援など

取組事例

📘 パートナーと進める、東大あぐりえこん。

「東大あぐりえこん。」は、農家の方々や商工会、行政と連携して地域づくりプロジェクトを進めています。市と協働したクラウドファンディングなど多様な外部支援を活用し、活動資金の確保と地域との連携を両立しています。東大あぐりえこん。.pdf

📘 産学連携が広げる、東京家政大学の食づくり

東京家政大学の「食べて考える！未来の食プロジェクト」では、民間企業との商品開発など、企業との連携を軸に活動を進めています。こうした外部協力を通じて新たなメニュー開発や学びの機会を広げ、食の可能性を高めています。　東京家政大学.pdf

第５章　発展的な取り組みへの挑戦
－農産加工、ブランド化、大学間／高大連携

活動が軌道に乗ったら、次はその魅力を深めていくステップです。魅力が高まることで仲間や支援が集まりやすくなり、地域への貢献度も大きくなります。その柱が、農産物の加工、ブランド化、大学間／高大連携です。
加工は農産物の価値を高め、イベントや販売での魅力を広げます。ブランド化は、活動の想いやストーリーを形にし、共感や応援を集めます。大学間／高大連携は、他の学生との学び合いを通じて活動の幅を広げます。
この章では、こうした取り組みのポイントを、事例とともに紹介します。

1 農産物の加工

収穫した農産物は、加工することで保存性が高まり、付加価値も向上します。これにより、イベントでの品揃えや試食品としての活用など、用途が広がります。また、加工に取り組む生産者や加工所の助言を得ることで、安全で質の高い加工品づくりに近づけます。加工では、次のポイントを守ることが大切です。

・衛生管理：調理器具の洗浄、温度管理、交差汚染の防止
・食品表示：原材料名、内容量、アレルギー、賞味期限、製造者情報など
・製造場所の適切性：衛生環境が整った加工所・シェアキッチンの利用

取組事例

駿河台大学の学生がつくる“おいしい未来”

駿河台大学の「nanacafe プロジェクト」では、地元の農産物を活かしたメニューを検討しています。加工の場では、清潔な調理環境づくりや手洗い・消毒、異物混入防止などの衛生管理を徹底し、商品を丁寧に仕上げます。　駿河台大学.pdf

むらの恵みを“かたち”にする学生たち

國學院大学の「KOOGA」では、地域で収穫した農産物を活かした加工に取り組み、甘夏ジャムは地元企業に委託しつつ、シロップづくりなどは地元の方の協力も得ながら学生自身が進めています。
國學院大学.pdf

2 ブランド化

ブランド化とは、単なる「見た目づくり」ではなく、活動の価値や想いを整理し、それをわかりやすく伝えるための仕組みづくりです。学生・地域・協力者が一目で「この活動だ」とわかり、共感が生まれる状態をめざします。

- ブランド要素：活動理念、ロゴ、キャッチコピーを統一する。
- 広報ツール：Instagram・X・大学ホームページで魅力を発信する。
- ストーリー：「なぜ取り組むのか」「何を生み出しているのか」を伝える。

取組事例

📘 想いを届ける“むら塾ブランド”のつくり方

「東大むら塾」では、「なぜ取り組むのか」という想いを大切にし、学生が自らブランドづくりに挑戦しています。理念を反映したロゴを整え、Instagram や大学 HP を通じて地域との協働や商品の魅力を発信しています。　東大むら塾.pdf

📘 棚田が生む“有機米ブランド”という価値

宇都宮大学「益子家」では、耕作放棄されていた棚田を学生と地域で再生し、大学開発の有機米「ゆうだい 21」を無農薬で育てています。棚田での丁寧な栽培は、強いブランドストーリーとなり、活動の象徴にもなっています。　宇都宮大学.pdf

3 大学間連携・高大連携

他大学との連携では、合同イベントや援農活動などを通じて活動の幅が広がる“横のネットワーク”が生まれます。一方、高校との高大連携では、大学生の企画に高校生が参加することで“縦のネットワーク”が育ち、次世代育成にもつながります。具体的な効果としては、次のような点が挙げられます。

・他大学の成功事例から学び、活動の質を高めるヒントが得られる
・合同でイベントを企画することで、規模や発信力が拡大する
・デザイン、マーケティングなど、専門性を活かした相乗効果が生まれる

取組事例

📘 “横のつながり”が生む新しい景色

「東大あぐりえこん。」では、他大学との連携を積極的に進め、農作業キャンプ等のイベントを通じて合同で学びと実践の幅を広げています。学生同士が刺激し合い、新たな価値を生み出す原動力となっています。　東大あぐりえこん。.pdf

📘 高校生と大学生で育てる“縦のつながり”

十文字学園女子大学の「高大連携プロジェクト」では、大学生が企画した食と農の学びに高校生が参加し、世代を超えた協働が生まれています。食育活動を通じて、高校生と大学生が互いの視点を共有し合っています。　十文字学園女子大学.pdf

最終章　地域とともに進化するサークルへ
－サークルの法人化、産官学連携

これまでの章では、活動づくりから魅力づくり、そして連携の広がりまで、サークルが成長していく過程を見てきました。活動が安定し、地域との信頼が深まってくると、次の発展段階として 法人化 や 産官学連携 といった、地域とともに進化していく取り組みが視野に入ってきます。

法人化は、助成金や寄付を受けやすくし、社会的信用を高める一方で、手続きや責任も増えるため、規模に合わせて無理なく進めることが重要です。また、産官学連携を活用すれば、資金・技術・広報面での支援が得やすくなり、互いにメリットのある協力関係を築くことができます。

この章では、法人化と産官学連携に踏み出すうえで欠かせない 「しっかりした運営体制」と「成果を示す力」について、ポイントと事例を交えて紹介します。

○ しっかりした運営体制（運営の土台を固める）

法人化することで社会的信用が向上し、取引の拡大や資金調達の多様化につながります。団体として責任ある活動を行うためには、基本的な運営体制を整えることが不可欠で、以下がポイントになります。

・役割、目的、会計、衛生、安全面などルールを文書で義務化
・必要に応じて外部の専門家や大学の部署の支援を活用

○　成果を示す力（成果を見える化する）

サークル活動の発展・拡大、行政や企業等と協働する際など、活動がどんな成果を生んでいるかをわかりやすく示すことが重要で、以下がポイントになります。

・指標（販売数、参加者数、SNS 反応、交流人数など）を設定する。
・関係者ごとに役割とメリットを整理する。
・イベント後に振り返り、改善点を共有する。

今回紹介した事例以外にも、大学生が農作業や地域との交流を通じて、食や農への理解を深め、地域に貢献する姿を紹介しています。

農業・農村で活躍する大学生：関東農政局

関東農政局 大学生

※法令順守を意識した行動を心がけましょう。

取組事例

「黒川岡上学生農場」の法人化

明治大学の学生が有志で集まった団体「黒川岡上学生農場」は、多様な栽培や加工・販売、地域交流を学生主体で展開しています。法人化により助成金や寄付、企業協力を得やすくなり、活動がより安定しています。　黒川岡上学生農場.pdf

食の循環を生む、大東文化大学の連携

「TABETE レスキュー直売所」は、自治体の呼びかけで大学・JA・鉄道会社・企業など 6 者が連携し、食品ロス削減に取り組む産官学連携の好例です。学生は野菜の積み込みや販売に加え、組織運営や広報にも主体的に関わっています。大東文化大学.pdf

MEMO